

1. さくら心セラピー・夜

赤いランプがまわり、警報音が鳴っている。ガラス窓が割られている。

2. 同・奥の問診室

さくら (30) 「ごめんなさい、ごめんなさい……」
女 (40) 「あなたのせいよ…あなたがあのとき死なせてくれなかったから」
首から血を流すさくら。
切りつけた大きなハサミを持つ女。
が、駆け付けた警察に抑えられる。

3. 数年後・IT会社オフィス

さくら 「……」
首に傷の残ったさくらは、デスクで仕事
中。
タケル (33) 「さくらさん」
さくら 「はい」
タケル 「さくらさんって、元カウンセラーで
しょ。ちよっとお願いがあって」

4. 同・会議室

VRゴーグルをつけたさくら。
PCを操作するタケル。
テーブルのマイクロドローン
が飛び、人間の目の高さでホバリング。

さくらの視界。OSが立ち上がり、リンクを求められる。

タケル「リンクして」

さくら、OKボタンを押すと、**Google内に侍（AR上にしか存在しない）が現れる。マイクロドローンは侍の目線を示すようだ。**

さくら「わっ」

サムライは刀を抜いて、まわりを警戒する構え。タケルとさくらを睨みつける。サムライの顔の角度に合わせ、ドローンも動く。

サムライ「おい！ここはどこだ！彦丸をどこへやった！」

さくらは思わずGoogleを外す。当然、サムライも消える。ドローンは部屋中を飛び回っている。さくらは過呼吸気味。

さくら「はあ、はあ…なんですかこれ、新しいキャラですか」

タケル「そう。ほら、こないだフィルムが見つかった昔の時代劇あるじゃないですか」

さくら「ああ…未完成のやつ」
タケル「そうそう、その主人公よ。カゲロウっていうんだけど。あの映画著作権切れてるみたいだからさ、つくってみたのよ人格を。でもなんていうか、うまく教育できなくて」

さくら「教育：？」

タケル「自律してから、言うこと聞かないんだよね。命令が入らんなくて。まだ映画の設定の中に生きてんのよ」

さくらが再びGoogleをかけると、カゲロウは気づいた。

カゲロウ「おい、女！」
迫ってくる。

さくらは思わずマイクロドローンをはたく。床に落ちて動かなくなるドローン。

さくら「ごめんなさい…」

タケル、ドローンを拾いつつ
タケル「大丈夫、頑丈だからこれ」
さくら「やっぱ無理です、教育とか」
さくらは**ゴーグルを外し**、会議室を出
ていこうとするが、タケルに止められ
る。
タケル「待つて待つて、さくらさんにしか頼
めないんだよ、お願い」
さくら「技術部で解決することでしょう」
タケル「命令じゃなくて、対話で解決してみ
たいんだよ。いざれ模造人格を商品化する
なら、大事なステップだと思わない？」
さくら「カウンセリングは、もうしないの」
タケル「でも、さくらさんに紐付けちゃった」
さくら「え：NFTなんですかこれ」
タケル「そ。捨てないでね、本体これで、世
界にひとつだから」
タケルはさくらの手をとってタブレット
トを持たせると、会議室から出ていく。
取り残されたさくら。
さくら「最悪：」

5. やくらの家・リビング

さくらは再び**ゴーグルをかけて**、**AR**
を呼び出す。
カゲロウ「恐れ入った」
さくら「は？」
カゲロウ「張り手で倒されるとは、不覚」
さくら「ああ、さっきの：」
カゲロウ「お主、相当の達人とみた。折り入
って頼みがある」
さくら「ま、まあ、座ってください」
さくらも座る。マイクロドローンが高
度を調整し、合わせてカゲロウも座ろ
うとするが、当然椅子がひけない。
さくらが立ち上がり、椅子をひいてあ
げる。カゲロウは座ろうとするが、椅

子をすり抜けて尻もちをつく。

さくら「なるほどね…」

カゲロウ「…終始、こんなだ。なんなんだ、

おれは幽霊にでもなったのか？」

さくら「うーん、ちよっと長くなるな」

× × ×

さくらとA Rカゲロウ、床にあぐらで
向かい合って話し込む。

さくら「そう。ちょうどそこで、フィルムは
終わってるの」

カゲロウは手元の似顔絵（これもA R）
をさくらに見せる。

少年の顔が描かれている。うまい。そ
れを見たさくら、思わずつぶやく。

さくら「うまいね…」

カゲロウ「息子はいまも富士のてっぺんで、
おれの助けを待ってるかもしれない」

さくら「だから、あなたが息子を助けられた
かどうかは、現時点ではわからないのよ。

フィルムが見つかってないんだもん」

カゲロウ「うむむ…さくら殿。わけのわから
ないことを言っていないで、とにかくおれを

富士山まで連れて行ってくれよ」

さくら「行って、どうするのよ」

カゲロウ「息子を…彦丸を、助ける。さらっ
た山賊を、たたっ切る」

さくら「だから、富士山に行ってもいないん
だって」

カゲロウ「じゃあどうすればいいのだ！」

さくら、考え込む。そして思いつく。

さくら「…そうだ」

スマホで何か検索しはじめる。

6. おじいさんの家・客間

さくらが、おじいさん（80代）にゴー

グルをつけてあげる。

さくら「すいません、突然押しかけてこんな」
おじいさん「いやいや、とんでもないな：おお！」
さくら「見えてます？」

おじいさんの視界に、カゲロウがいる。
おじいさん、涙を浮かべる。

おじいさん「三澤さん：！」

カゲロウ「三澤じゃない、カゲロウだ」

おじいさん「お嬢さん、その写真を」

さくら、棚に飾った写真を持つてくる。
それは、撮影所での記念写真。

カゲロウと同じ姿をした俳優・三澤が
小さな男の子を抱いて映っている、古
い白黒写真だ。おじいさんは写真をカ
ゲロウに見せる。

カゲロウ「彦丸！」

おじいさん「私です。こんな、じいさまにな
ってしまいました」

7. おじいさんの家・玄関(夕方)

さくら「これ：」

古い台本を渡すおじいさん。

おじいさん「結末を、彼に話すかはおまかせ
します」

8. 電車(日暮れ)

さくらが、もらった台本を読んでいる。
最後のページを読んで、動揺し、閉じ
る。あたりを見回して、電車から降り
る。

9. ビジネスホテル(夜)

カゲロウ「息子が：元からないだど？」
さくら「そう。全部あなたの妄想。そういう
結末」

脚本を握りしめるさくら。

カゲロウ「では、これは」

カゲロウ、手元の息子の似顔絵を見る。
さくら「それは小さい頃のあなた。さらわれ
たのは、あなた」

カゲロウ「そんな：そんなこと」

さくら「残酷な脚本だと思うよ。でも、そう
なの。事実なの。まあフィクションだから、
事実とも言えないけど：」

カゲロウ「おれはどうすればいいのだ」

さくら「：どうしたい？気が済むまで、付き
合うよ」

カゲロウ「：富士山だ。のぼって、本当に息
子がいなければ：」

さくら「気が済む？」

カゲロウ「わからない：」

さくら「でもそう言うと思ったよ。明日、行
こう。だからここで降りて泊まってるの」

10. 富士山頂(翌日・昼)

見事な景色の端っこ、登山客の中に、
カゲロウが佇んでいる。

カゲロウ「その、脚本とやらでは、おれは何
をするんだ、ここで」

さくら「山賊を切って、息子がいないことを
知って：その：」

カゲロウ「切腹か」

さくら「そうね」

カゲロウ「しかし、おれは：」

さくら「手伝おうか」

カゲロウ「？」
さくら「私が山賊やってあげる。私を切りな
よ。そのあと：」
カゲロウ「しかしおれは、この通り」
さくら「切腹ができないなら、私が葬ってあ
げる」

× × ×

カゲロウの視点。さくらの姿が、山賊
の姿に変わる。さくらが台本を見なが
らなので、山賊も不自然な手の動きを
しながら、カゲロウに向かって叫ぶ。
さくら「お前に息子なんかいねえ！みんな知
ってるよ！みんなお前のうわごと、付き
合ってくれてただけだ！優しいよな！え？
サムライくずれさんよ！お前はな、父親で
も、サムライでもねえんだよ！」

カゲロウ「黙れ！黙れ！」
カゲロウは、山賊姿のさくらの首に思
い切り刀を振る。さくら、閉じていた
目を開く。

さくらの脳裏に、冒頭のハサミを持っ
た女の顔が蘇る。泣いている。

カゲロウの刀は当然、さくらの首をす
り抜ける。

さくら「：どう？気は済んだ？」
カゲロウは答えない。無操作中のゲー
ムキャラのように、その場でバウンス
している。

11. さくらの部屋(後日)

タケルとテレカンしているさくら。
タケル「ねー、教えてよ。どうやって解決し
たのか。会話のログ入れなくて」

さくら「いいでしょ、命令できるようになったんだから。もう切るよ」
テレカンを終了。

× × ×

さくらの

プリンタから出てきたのは、さくらの似顔絵。カゲロウの絵柄である。首の傷もしっかり描かれているが、絵の中のさくらは笑顔である。さくらは壁にその絵を貼り、窓の外を見る。高層階のそこから見える景色。遠くには、富士山が見える。

終